

周防大島をこよなく愛す アイデアと元気あふれる実業家



周防大島町

米沢功臣さん（57歳） 周防大島町出身

周防大島町在住
「周防大島元気村」村長
1999年東京都からUターン



米沢さんとビニールハウスで栽培中の花の苗

フラワービジネスで第二の人生に活路

バブルの最盛期に、当時勤めていた石油会社が新規事業を始めるということで、フラワービジネスの会社を立ち上げたんです。それで、その会社の営業担当部長として出向し、オーストラリアから現地の花を輸入したり、花の苗を全国の農家に栽培を委託したりする仕事を5、6年やってました。

私自身、欲張りな性格なので“二つの人生”を歩んでみたいと思い、40歳を過ぎた頃から、妻には「50歳までにはどこかで見切りをつけるよ。」っていう話を常々していて、「会社を辞めた後に何をしようか」ということはずっと模索をしていたんです。

その後、バブルがはじけて、フラワービジネスからの撤退が決まり、さらに中高年者を対象に希望退職を募るということになりました。それがちょうど私が48歳のときで、それならこの機会に会社を辞め、自分でオーストラリアから花を輸入して販売する事業をやってみようと思ったわけです。

「なぜ海外の花なの？」と、よく聞かれますが、例えばキクとかバラとか、長く日本で栽培されている花は先輩生産者のレベルが高く、品質がいい上に、流通量も十分にあるため新規参入はむずかしいんです。

一方、オーストラリアとか南アフリカの花など、まだ日本に紹介されていない花は、花自体が珍しいわけですから、市場からクオリティを求められていない。その分、一から花の栽培をやるという人でも取り組みやすいというわけです。



米沢さんが栽培を手がける「サマーポインセチア」
原産地はアフリカ

事業は生まれ故郷の周防大島でやってみようと思いました。それで、当時の大島町役場に行き、担当者に条件に合う農地がないかと相談したら、その担当者が熱心な方で、「あなたにちょうどいいのがあるから調べてあげよう。」と言ってくれたんです。

その方が、わずか1週間のうちに5人の地主さん全員を集めてくれて、トントン拍子に話しが進み、この3,000坪の農地を借りることができました。やはりこうしたときの行政の対応は、移住先を決める上で重要なポイントになりますね。

やまぐちの魅力

まず、「人」ですね。周防大島町でいうと、山陽の温暖な気候からくるものだろうと思いますが、明るい性格の人が多し、開放的で、うちとけやすい。そういう点ではオーストラリアの人に共通する部分があると思います。

それと、山口県全体でいうと、日本海に面した地域、瀬戸内海に面した地域、そしてその間にある山間地域、それに離島もあれば冬は雪深い山村もありますよね。

そんなに大きな県ではないけれど、非常にバラエティに富んだ地域特性を持っている県だと思います。そういう点では、移住を考えている人々が望んでいる多様なライフスタイルに対応できる、選択肢の多い県だと思いますね。

ですが、せっかくこんないろいろな可能性を持っている県なのに、都会での山口県の認知度が低いのは残念ですね。東京に住んでいた頃、妻は、東京の人から「山口県でどこにあるの？」って何度も聞かれて驚いたと言っていました。山口県を移住先に選んでもらおうとするのなら、もっと認知度を高める努力が必要だと思います。



周防大島元気村の「本部」仲間と一緒に3年がかりで完成

これからの「夢」

いつの話になるかわかりませんが、民宿をやってみたいと思っています。全国からいろいろな人に泊まりに来てもらって、花の栽培方法を教えたり、園芸農家としての生き方なんかについて語り合ってみたいんです。いわば、“園芸道場”のようなイメージのものにしたいですね。それと、周防大島をもっと多くの人に楽しんでもらえる島にすることです。

今、観光協会の理事をやらせてもらっていて、皆さんに教えてもらいながら、わいわいがやがや話し合っています。それがまた、私の気力と活力のもとになっているんです。

それに、移り住んでまだ6年しかたっていない私が「国民文化祭2006」の推進委員長をやっているんですよ。皆さんに「これからは若い人にやってもらわにゃ困る。」と言われてまして。この島じゃ、私なんかまだまだ若造ですよ。これが会社だったら、そろそろ「お払い箱」の年齢ですが、住む場所を変えたら逆に期待してもらえる人材になることがあるんだなと感じました。



柳井市と周防大島町を結ぶ「大島大橋」

皆さんへのアドバイス

定年後のライフスタイルは、昔と比べればずいぶん変わってきていると思います。

この島にも、定年後、1年のうちの半分を東京で暮らし、あとの半分はこっちでミカンを作って、そのミカンを通信販売で売っている人がいます。それに、京都出身の方ですが、釣りが趣味で夫婦で移住してきて、いつか大島での釣りに飽きたらまた別のところへ移るんだそうです。

こんなふうには、「UJIターン」ということを、あまり堅苦しく考えないほうがいいと思うんです。都会と田舎を行ったり来たりしながら、ゆっくり時間をかけて移り住む先を決めればいい。私が勧めるのは、いきなりそこに家を建てて移り住むんじゃなくて、まず、その土地の四季を経験してみることです。別に1年間ずっとじゃなくても、春、夏、秋、冬と、数日間でもいいから住んでみるんです。そうすればその土地や住民のことがよくわかるし、もし合わないと思ったときは後戻りもできます。

それと、定年後に何をやるかというのを考えるとき、これまでの経験を生かして、ちょっと目先の変ったことを考えてみてはと思います。例えば、大島に移り住んでミカンを作るとしたら、みんなと同じようにミカンを作って、同じように市場を通じて売るんじゃなくて、インターネットを通じて直接販売するとか。

皆さんせっかくいろいろな経験を積んでこられたんですから、それを活かすことができれば、セカンドライフはもっと生き生きとした面白いものになるんじゃないかと思っています。